

◎野木京子 12月

きみという孤島を  
ぼくは背泳ぎで目指すよ、  
それも全力のやつ

さいう (愛知県)

\*クロールでなく、前を見ずに泳ぐ背泳ぎで「きみという孤島」をめざす。それも「全力のやつ」で、ゴール位置を確認する余裕もなくがむしゃらに進む。さいうさんの詩は、具体的な描写をして心の深みを表すので、いつも感心する。

ファミレスの客待ち名簿に  
いつもとは違う名前を書く旅先で

猫谷圭希 (広島県)

\*こういう感覚で旅をすると、違う人生を歩いている気持ちになれる。平板な日常生活との微妙なずれを、巧みに描いている。

孤独って透明な火のことですか

ササキリ ユウイチ (群馬県)

\*「透明な火」という目に見えないイメージが美しい。その火は冷たいだろうか、熱いだろうか。孤独を火と捉えることで、ろうそくの中心にある芯のイメージも浮かぶ。火と芯に支えられているなら、孤独は少しも怖くない。

地震だと聞けば津波は原発は  
十年経っても剥き出しの傷

加藤 美紀 (愛知県)

\*加藤さんの詩は直截で、まっすぐ届き、胸を打たれる。これまでも、そしてこれからも、剥き出しの傷を抱えたまま生きていく。

雨音で目覚め  
やってきた不安と  
話をする

ヒラノユリア (神奈川県)

\*雨は不安の象徴。不安を抱え込むのではなく、「話をする」ところが心に響く。不安はどんな声でどんな返答をしてくれたのだろうか。

廃屋の縁側に  
傷痍軍人名簿ひとつ

最上葉途（山口県）

\* 不思議な味わい。縁側は、外側でも内側でもない、あいまいな境界の場所。廃屋のその場所になぜ傷痍軍人名簿が置かれていたのかわからないまま、読者は異世界との境界に直面する。時間も、戦時中へと一気に遡る。

しりとりをする子  
きりんとライオンのぬいぐるみを  
ぎゅっと抱きしめている

広田 土（大阪府）

\* 言葉遊びでもあるのでおもしろい。「きりん」も「ライオン」も「ん」で終わるから、しりとりで負けてしまう。はじめから負けが決まっているように、ぬいぐるみを「ぎゅっと抱きしめている」姿がいじらしい。

かりん酒を漬ける  
じっちゃんの横顔を  
ふっくらさせて夕焼けは来る

さいう（愛知県）

\* 平凡な感性だと、夕焼けが輝く、と書くところだが、さいうさんは「夕焼けは来る」とした。夕焼けはどこから来るのだろう。人間を越えた動きが感じられて、風景が大きい。

補助輪無しで  
自転車に乗れた日の事を  
覚えていたら  
僕らはもっと優しくなれる

まちりこ（埼玉県）

\* しみじみと共感した。この詩を読んで、私も、初めて補助輪なしの自転車に乗れた日を思い出した。乗れたことへの驚きとうれしさ、自転車の練習に付き合ってくれた父親への感謝も、この詩を読んだおかげで思い出した。

にせんにじゅういちねんを水飛沫  
あげて渡ってくももいろのくじら

藤ほたる（神奈川県）

\*大晦日に投稿された詩。空を見あげたら桃色のクジラが泳いでいる！ そんなはずはないけれど、その光景が見えるよう。クジラが渡っているのは空なのか、時間の推移なのか。去年今年を貫くのは棒ではなく、桃色のクジラ。下界で人間があたふた走り回る師走に、桃色クジラが上空を悠然と泳いでいるという発想が楽しい。